

茨城論壇

『武家の女性』で、「東湖の妹婿の桑原幾太郎の孫政さんという子なども、延寿のお弟子の中で指折りの秀才」と記して、さすがに血筋は争われぬとしているが、政は幾太郎の孫ではなく次男である。

「お塾の先生が江戸へ出て帰るときなどには、お弟子たちは水戸の一つ手前の駅、長岡まで出迎えた」とある。英雄が発校女学校（現在の水戸市立五軒小）を辞し、上京時にも生徒たちは長岡の宿まで見送りに来ており、英雄は子どもたちに別れのあいさつをしている。「上京にあたり発校女学校生徒へ与える辞」（1875年11月23日）の中で、まず月日の早く過ぎ去ること

茨城女子短期大名譽教授

小野 孝尚

を述べ、「學事に勤め侍れと又さらにひたすら婦徳を修め文質彬々たる女君子」に豊田英雄の教育理念があり、これらの教えは生涯にわたり貫いている。

晩年の水戸市大成女学校

水戸の武家で学び培う

（現在の大成女子高）の校長時代には「人格高き女子を造れ」を標榜し、『いはらき』新聞（1924年1月11日）の「水戸の婦人に望むこと」

の中で、また教育者そのものもたゞ学芸技術を授けるだけでは到底眞の教育は出来ない。つまり「まづその人を得よ」であると思ひます」にも英雄

の中では、「表面の事のみにまつてゐてあまりに精神的のところが欠けている様です」と述べ、女学生は華美にならぬようにし、「只今の教育のやうに、たゞ知にのみ走る事は精神の美の失はれてしまふも

の教育觀の一面を垣間見るこゝとができる。これらの精神の原点は、幼少時から水戸藩という武家の環境と儒學者の家庭環境によつて培われてきたものであり、水戸でなければこのような人材は育たなか

が、元治の乱の後、入牢中、子供らに『論語』を教えた話も伝わっており、豊田英雄刀自の話では久木直次郎の妻となつたますも才学があり、烈公の侍女となつていたころ、御殿では朋輩の妬みを避けて、本箱をつしる向きにして壁におしつけ、人の見る所では書物を手にしないように気をつけていたといふこと

です。」と書いている。久木直次郎に嫁いだ三女のますは、『漢書』を学び、家庭では經書を手伝ふといふことでした。これも当時としてはあまり例のなかつたことでしょう。」と記しており、他にも歌を詠んだり書をよめる婦人はいたが、それらは、父か母かにその心得があり、「家の伝統によるもので、一般には、女は平仮名で手紙のやり取りができれば十分とされて

つたであらう。幕末の天狗、諸生の争乱において女子ゆえに生き延び水戸學の精神を受け継いだ女丈夫といえよう。

また、『武家の女性』には、当時の「水戸では、女に學問をさせると縁が遠くなるとか、また血筋をよそに持つていかれるとかいって厭がりま

した。」「藤田東湖の妹たちはみな仕込まれた様子で、武田耕雲のよめとなつたいく

おのこつしょう＝茨城女子短期大名譽教授1944年生まれ。水戸市在住。大正大大学院文學研究科博士課程単位取得満期退學。茨城女子短期大前學長。2017年「茨城の近代詩人群像」、19年「幼児教育・女子教育の先達 豊田英雄とその時代」を茨城新聞社から出版。茨城の文學研究をライフワークとし、豊田英雄の教育理念の次世代への継承と顕彰活動に努めている。



はみな仕込まれた様子で、武田耕雲のよめとなつたいく

代を父君や兄君力太郎と共に

いました。」とある。